

タイ・シンガポール海外研修の前後における 大学生の訪問国・日本に対する印象の変化とその背景 —アンケート調査及び感性工学による分析—

井形 元彦^{1*} 先川 信一郎² 倉橋 孝幸³ 浜村 早希²

(受領日：2017年5月8日)

¹ 高知工科大学情報学群
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

² 高知工科大学国際交流部
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

³ 高知工科大学総務部
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: igata.motohiko@kochi-tech.ac.jp

要約：タイ・シンガポール研修に引率者として参加する機会を得、海外研修の評価を何らかのかたちで実施できないかと考えた。その1つとして、研修の前後における学生の訪問国及び母国に対する印象の変化を分析した。さらに、外国人とのコミュニケーションをとることへの抵抗感、海外で働くことへの思いの強さの変化についても調査した。それも踏まえて海外研修の意味するところに触れてみることにした。調査・分析にあたっては、アンケート調査及び感性工学（Semantic Differential Method）を用いた。国に対する印象として、主要な因子として「美しく先進的」と「活気があり開放的」の2因子を抽出できた。シンガポールが2つの因子にて高いレベルにある。タイは「美しく先進的」では大きくマイナスであるが、「活気があり開放的」という点では訪問前後で大きく良い印象に変化している。日本は、「美しく先進的」という点でプラスではあるが、シンガポールに比べややマイナスであり、「活気があり開放的」という点ではタイ、シンガポールに比べ大きくマイナスである。本稿では、先行研究についての紹介、今回の海外研修の概要、調査・分析の方法、結果と考察を述べた。

1. はじめに

大学として、グローバル人材の育成及び世界トップレベルの大学との交流・連携が強く求められている。高知工科大学においても、国際サマースクール、海外研修（アジア）、海外英語研修、海外インターンシップなど、学生のグローバル対応力の向上に努めている。

今回、タイ・シンガポール研修に引率者として参加する機会を得、海外研修の評価を何らかのかたちで実施できないかと考えた。その一つとして、研修

の前後における学生の訪問国及び母国に対する印象の変化を分析し、そこから海外研修の意味するところに触れてみることにした。まず、海外研修の評価に関する先行研究を概観したのち、我々の調査・研究の内容について述べる。

2. 先行研究

本稿の趣旨に近い「海外研修の前後における国に対する印象とその変化」について調査・分析したものとしては、次のような論文がある。

相川¹⁾は、高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に、肯定的な影響を及ぼすかどうかを統制群との比較を通じて検討し、次のように述べている。調査対象者は県立商業高校2年生、修学旅行先がシンガポールの参加群120名、修学旅行先が九州である不参加群122名であった。両群に対して、修学旅行の前後2回、シンガポールの国と人に対するイメージ調査、国際理解の程度を調べる質問を実施した。その結果、シンガポールの国と人に対するイメージは、不参加群では、旅行前後でほとんど変化がなかったが、シンガポールに出かけた参加群は、シンガポールに対して、開放的、明るい、自主的、若い、活気に満ちた、親しみやすい、という肯定的方向へのイメージの変化があった。また、国際理解度の変化を調べたところ、修学旅行前には参加群と不参加群に差がなかったが、旅行後には、参加群において有意な変化が認められた。このような結果を踏まえて、海外の国や人に対する高校生のイメージや国際理解に肯定的な変化をもたらすような海外修学旅行のプログラムを構成する必要性があると、論じている。

小川²⁾は、大学生13名を対象に、研修旅行が訪問国(マレーシア)と母国(日本)に対するイメージ及び文化交流の関心に与える影響について検討し、次のように述べている。文化交流の関心については、感想文からカテゴリー分類を行ったところ、言語学習意欲や自文化の見つめ直しなどのカテゴリーが抽出された。本研究により、短期間での研修旅行において訪問国だけでなく、母国に対する認識にも影響を与えることが示唆された。マレーシアに対する印象と日本に対する印象については対照的な結果となった。マレーシアに対する印象は研修前より研修後において肯定的な得点が高かった。「後進的な—先進的な」「原始的な—近代的な」という項目については平均値においても、優越率においても高い値を示した。日本に対する印象については、研修前より研修後において肯定的な得点が低かった。最も平均値の差が大きかったのは「変化しにくい—変化しやすい」であり、「変化しにくい」という印象になった。これはマレーシアとの比較によって生じた結果であると考えられる。日本が国として発展しているものの、参加者が予想していた以上にマレーシアが発展している印象があったため、相対的に「変化しにくい」という印象になったのであろう。次いで「攻撃的な—穏やかな」と「親しみにくい—親しみやすい」が否定的に変化した。これらの項目においても、マレーシアで現地住民と触れ合

うことやスローライフを経験したため、相対的な評定を行い日本の平均値が下がったと考えられる、と述べている。

浅野³⁾は、中央大学で実施するマレーシア研修旅行が、(a)訪問国に対するイメージ、(b)国際理解の程度、(c)外国語運用能力の認識及び外国語学習への動機づけに、どのような影響を与えるかを検討し、次のように述べている。調査の結果、短期的な海外研修旅行であったとしても、訪問国に対するイメージは「雰囲気」と「経済・環境」の両側面において、概ね好転することが示された。一方、国際理解に関する「人権の尊重」、「他国文化の理解」「世界連帯意識の育成」という、側面に関しては、研修前後で認識の変化は認められなかったものの、「外国語の理解」に関しては、研修後に向上する傾向があった。本研究で検討したのは、認識の変化ではあるが、本研修旅行によって、外国語運用能力の向上及び外国語学習への動機づけの促進が生じる可能性が高いことは示唆されたと考えられる、としている。

国についての印象の変化ではないが、海外研修についての評価に関する研究としては、下記のように様々な観点から行なわれている。

- 学生の報告書の多面的な分析を通して短期海外研修による教育的効果を主観的に記述された報告書を分析の対象に再検討したもの^{4,5)}。
- ハワイやニュージーランドにおける短期海外研修を振り返り、その教育効果と研修に参加した学生のカルチャーショックの観点から考察したもの⁶⁾。
- 大学生の海外研修旅行中に実施する自己省察を促すワークショップの有効性を検討したもの⁷⁾。
- ヨーロッパ海外研修を対象に言語の中の文化を再考することにより海外研修を言語教育に生かすことを論じたもの⁸⁾。
- 9日間の台湾研修の参加者のアンケート記述を異文化コミュニケーションの観点から分析したもの⁹⁾。
- 韓国文化交流研修での取り組みを分析し海外研修が社会人基礎力育成プログラムとして如何なる役割を果たしているのかを検証したもの¹⁰⁾。
- ナラティブ研究アプローチを使い、2週間の海外語学研修中に学生のジャーナルに出現したポジティブ、ネガティブな感情と、それらをもたらしたモチベーション、行為主体性、学習コンテキストとの関係を探ったもの¹¹⁾。

- 海外研修が学習意欲に及ぼす影響について帝京大学経済学部「アメリカスポーツマネジメント研修」を事例に、参加学生の学習動機の変化について検証およびスポーツビジネスの本場で実施する海外研修における効果について論じたもの¹²⁾。
- 大学が実施している短期の海外研修プログラム（ハワイ研修、海外幼児教育研修、海外ボランティア実習）が学生たちの自信にどのようにつながっているのかを調べたもの¹³⁾。
- 約2週間の米国短期海外研修プログラムの概要、及び、教育的効果を考察したもの。短期研修だけで発信力や英語運用力が特段高まったとは言えないが、異文化体験を通じて、海外の文化への興味・関心を高め、コミュニケーションの方法や価値観の相違等に関する様々な気づきを促したという点では成果があったのではないかと考えられる¹⁴⁾、と述べている。

3. タイ・シンガポール海外研修の概要

タイ・シンガポール研修の募集要項は次の通りである。研修日程を表1-3に示す。

3.1 目的

1. 海外大学の学生と交流し、またアジア諸国の活力を目の当たりにすることで、帰国後の学修に対するモチベーションを高める。
2. 異文化に触れることで、国際的見識を深める。
3. 英語によるコミュニケーション力を向上させる。

3.2 研修期間

2017年3月5日（日）～3月15日（水）

3.3 研修先

- タイ
Thai-Nichi Institute of Technology
（泰日工業大学）
Chulalongkorn University
（チュラロンコン大学）
King Mongkut's University of Technology Thonburi
（キング・モンクット工科大学トンブリー）
- シンガポール
シンガポール科学技術研究庁、企業等

3.4 研修内容

各大学で学生との交流や見学、文化史跡・企業の

見学等を行なう。

タイの大学生（泰日工業大学（TNI）、チュラロンコン大学、キング・モンクット工科大学トンブリー（KMUTT））との交流が主となっている。キング・モンクット工科大学トンブリー（KMUTT）の学生とは3日間にわたってPBL（Project Based Learning）の手法によるグループ活動を行なった。

3.5 応募資格

以下のいずれの条件も満たす者

1. 海外研修までにTOEICスコア200点アップを目指す意欲のある者

注1 この海外研修は海外初・中級者向けのプログラムであり、この趣旨及び上記の目的に沿った者を優先的に選抜する。ただし、十分と思われる海外経験を有する者についても、それら海外経験から発奮し、努力を続けている場合、リーダー・チューターとして2名程度の参加を認める。

4. 調査・分析の方法

4.1 感性工学とは

感性工学の定義については、様々な説明がある¹⁵⁾。感性工学の先駆者である長町による「感性工学」の定義は次の通りである¹⁶⁾。感性工学とは、「商品に抱いている心理的イメージを具体的な商品設計に翻訳し表現する技術」のことである。生活者が商品を購入したいと考えたときに、漠然とながらも「落ちついていて使い勝手がよくて……」といろいろな想像するはずである。このようなイメージを感性といっており、生活者のこの漠然とした感性を商品の設計に具体的に表現する技術、のことをいう、と述べている。

この感性工学の考え方を、国に対する印象の把握に本論文では適用した。

4.2 SD法（Semantic Differential Method）とは

感性工学の一つの分析方法であるSD法を本論文では適用した。SD法とは次のような手法である¹⁷⁾。

この方法は、アメリカの心理学者のオズグッド（Osgood, C.）が、概念（対象）の意味の測定のために開発した方法である。“Semantic”を辞書で引くと、「意味論の」と訳されているが、オズグッドのいう「意味」というのは、いわゆる辞書的な意味ではなく、感情的な意味“affective meaning”を指す。また、“differential”という言葉も辞書で引くと、「微分」という意味もあるが、ここでいう“differential”というものは、「差」“difference”のことを指すよう

表 1. 海外研修の日程 (1)

	月日		場所	現地時間	全体スケジュール
1	3月5日	日	高知発	18:25	空路、羽田空港へ
2	3月6日	月	羽田発 バンコク着	00:30 5:35 14:30 14:30-15:00 15:00-16:00 16:00-16:30 16:30-17:30 17:30	空路、バンコク (スワンナプー無国際空港) へ 泰日工業大学 (TNI) C 棟 5F C502 教室 到着 * 挨拶 (KUT 学生代表) TNI 学生の自己紹介、バディ顔合わせ オリエンテーション by 児崎大介さん (タイでの生活について) 講義「Transformations to Digital Thailand」 by Wimol 先生 夕食会 @ C502 教室【解散】 帰宿 (約 1 時間半~2 時間)
3	3月7日	火		9:30-10:30 10:30-11:30 11:30-12:30 12:30-13:30 13:30-14:30 14:30-15:30 15:30-15:45 15:45-16:30 16:30-17:00 17:00 夜	講義「Thai Affairs」 by 池田隆先生 講義「Food, Clothing and Shelter in Thailand」 by 児島さん ランチ @ 学食 with バディ 研究室見学 (3 グループに分かれ、各 20 分) Racing Car lab / IES Lab / AMDRL La タイ文化について学習 @ A601 - タイボクシング - タイ音楽器 - タイの踊り タイ文化の成果発表 コーヒーブレイク * KUT 学生プレゼン・パフォーマンス * お別れの挨拶 (KUT 学生代表)、片付け等【解散】 帰宿 (約 1 時間半~2 時間) 夕食 (各自自由)
4	3月8日	水		8:00 8:30-9:30 9:30-10:30 10:30-11:30 11:30-12:30 12:30-13:30 13:30 14:30-16:30 16:30 17:00	チュラロンコン大学 工学部 3 号館前 到着 Falan 先生の案内で部屋まで移動 Withit 先生入室、バディ顔合わせ * 挨拶 (KUT 学生代表) 講義 by Withit 先生 研究室見学 * KUT 学生プレゼン・パフォーマンス ランチ @ 学食 with チュラ学生 博物館見学 (徒歩 or バスで移動) ※時間がなければ省略 13:30 チュラロンコン大学出発 14:30-16:30 王宮、ワットプラケオ、ワットポー等見学 with ガイド&チュラ学生 16:30 ワットポー出発 17:00 チュラロンコン大学着、チュラ学生降車。【解散】。帰宿 夕食 (各自自由)

表 2. 海外研修の日程 (2)

月日		場所	現地時間	全体スケジュール
5	3月9日	木	9:40-9:50 9:50-10:00 10:00-10:05 10:05-10:45 10:45-11:30 11:30-12:00 12:00-13:00 13:00-13:30 14:00-16:30 夜	ANAK 先生 挨拶 KMUTT インTRODクシヨン * 挨拶 (KUT 学生代表) * KUT 学生プレゼン (パフォーマンスはここではしない) KMUTT キャンパスツアー ランチ with バディ KMUTT の宿泊施設 (Heliconia) チェックイン Project Based Learning with バディ (アイスブレイク、班決め、テーマ決め) 【解散】 夕食 (各自自由)
6	3月10日	金	8:30 8:50 9:00-12:00 12:00-13:30 13:30-16:30 夜	Heliconia の 1F に集合 (KUT のみ) 教室に集合 (KMUTT 学生も集合) Project Based Learning with バディ (ゴール設定、リサーチ、調査、発表スライド作成) ランチ with バディ International Fair 参加 * KUT 学生パフォーマンス 【解散】 夕食 (各自自由)
7	3月11日	土	8:30 8:50 9:00-11:30 午後 夜	Heliconia の 1F に集合 (KUT のみ) 教室に集合 (KMUTT 学生も集合) Project Based Learning with バディ (発表) * お別れの挨拶 (KUT 学生代表) 【解散】 ランチ with バディ 自由行動 夕食 (各自自由)
8	3月12日		11:45 12:00 14:00 15:50 16:35 19:55	チェックアウトを済ませた状態でロビー集合 KMUTT 発 スワンナプーム国際空港着 チェックイン後、空港内で自由行動、各自出国審査 集合【搭乗口前】 空路、シンガポール (シンガポール・チャンギ国際空港) へ
9	3月13日	月	9:30-10:30 10:30-11:30 11:30-12:00 12:00-13:00 13:00-14:00	Fursion World 見学 * ツアー後、質疑応答 (必ず質問すること) * お礼の挨拶 (KUT 学生代表) 講義「A*STAR 技術開発五カ年計画 2020」予定 バイオポリスへ移動 ランチ with 井上先生 講義「SARS から ZIKA までの感染症」by 井上先生

表 3. 海外研修の日程 (3)

月日		場所	現地時間	全体スケジュール	
9	3月13日	月	シンガポール	14:00	* お礼の挨拶 (KUT 学生代表) 2 班に分かれる
				14:30	技研製作所へ出発 Buona Vista 駅～Tanjong Pagar 駅
				16:00-17:00	技研製作所訪問 * シンガポールでの活動内容、建設業界の事情等の話 (30 分) * 学生 1 名ずつ質疑応答 (30 分) * お礼の挨拶 (KUT 学生代表)【解散】
				14:00-14:30	フュージョノポリスへ戻る
				14:30-15:30	講義 by Julie Miyuki Colby 先生 (国立シンガポール大学)
				15:30-16:00	ビジネスインキュベーター訪問 (日本語) * 学生質疑応答 * お礼の挨拶 (KUT 学生代表)【解散】
				夜	夕食 (各自自由)
10	3月14日	火	シンガポール	8:30	ホテルロビー集合
				9:00-18:00	自由行動
				18:30	ホテルロビー集合、荷物受け取り
				19:00	ホテル出発→空港へ
				19:30	シンガポール・チャンギ空港着
22:20	空路、羽田空港へ				
11	3月15日	水	羽田着	6:00	
			羽田発	8:10	空路、高知空港へ
			高知着	9:40	高知空港着

ある。また、感情的な意味“affective meaning”を、もう少しわかりやすい言葉でいえば、様々な対象の印象やイメージという言葉で言い換えることができよう。SD 法では、反対の意味を持つ形容詞を尺度の両端に置いた多くの評定尺度群を用いる。例えば、「良い-悪い」という形容詞対の尺度を例にとれば、被験者は、ある概念が、非常に良いと感じたら、その尺度の「非常に良い」に該当する欄に印をつけ、非常に悪いと感じたら、「非常に悪い」に該当する欄に印をつける。そして、チェックされた値を基に、形容詞対の平均値を求め、全形容詞対に同様の処理を行うことによって、対象となる概念のプロフィールを描き、刺激対象の感情的意味（印象）がどのようにとらえられているのかをその形から判断する。このプロフィールをセマンティックプロフィールという。次に、得られたデータを用いて因子分析をする。SD 法では、オズグッド以来の基本的な因子として価値因子（評価性因子）、活動性因子、力量性因子の3因子が共通して見出されることが多い。SD 法は、様々な刺激概念を対象とするこ

とができるのが大きな特徴で、そのために、様々な研究領域で用いられている。

4.3 調査対象者

参加者は、男子学生 11 名（3 年生 1 名、2 年生 4 名、1 年生 6 名）、女子学生 10 名（2 年生 1 名、1 年生 9 名）であった。

4.4 アンケート項目

SD 法の手法に則って、相反する形容詞を対にして一軸上に配置した項目（e.g. 後進的な-先進的な、規則を厳格に適用する-規則を柔軟に解釈する）に対し、7 段階（1=非常に：2=かなり：3=やや：4=どちらともいえない：5=やや：6=かなり：7=非常に）にて学生に判断を求めることとした。両端に近づくほどイメージが強いことを示す。先行研究である小川 将他²⁾をもとにアンケート項目（表 4）を設定した。さらに、研修後のアンケートでは、次の質問項目を追加した。

表4. アンケート（項目因子分析用）

	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
後進的な	1	2	3	4	5	6	7	先進的な
規則を厳格に適用する	1	2	3	4	5	6	7	規則を柔軟に解釈する
集団の結束力が弱い	1	2	3	4	5	6	7	集団の結束力が強い
親しみにくい	1	2	3	4	5	6	7	親しみやすい
不自由な	1	2	3	4	5	6	7	自由な
攻撃的な	1	2	3	4	5	6	7	穏やかな
理解しにくい	1	2	3	4	5	6	7	理解しやすい
つめたい	1	2	3	4	5	6	7	あたたかい
男女不平等な	1	2	3	4	5	6	7	男女平等な
変化しにくい	1	2	3	4	5	6	7	変化しやすい
貧しい	1	2	3	4	5	6	7	豊かな
沈滞した	1	2	3	4	5	6	7	活気に満ちた
原始的な	1	2	3	4	5	6	7	近代的な
敵対的な	1	2	3	4	5	6	7	友好的な
暗い	1	2	3	4	5	6	7	明るい
過ごしにくい	1	2	3	4	5	6	7	過ごしやすい
つまらない	1	2	3	4	5	6	7	おもしろい
不便な	1	2	3	4	5	6	7	便利な
閉鎖的な	1	2	3	4	5	6	7	開放的な
苦しい	1	2	3	4	5	6	7	楽しい
きたない	1	2	3	4	5	6	7	きれいな
雑多な	1	2	3	4	5	6	7	整然とした
スケールが小さい	1	2	3	4	5	6	7	スケールが大きい

(1) 将来、海外で働きたいと思えますか。

1. 働きたくない
2. まだ、わからない
3. 機会があれば、働きたい

(2) PBL などを通じて、外国人とコミュニケーションをとることへの抵抗感は少なくなりましたか。

1. まだまだ、抵抗感がある
2. 抵抗感は小さくなった
3. 抵抗感は全く無くなった

4.5 調査の時期

アンケートについては、研修前は出発日の3月5日に羽田空港にて、研修後は帰国の直後1週間に実施した。

データとして、有効なアンケート数は次の通りであった。

研修前 21名（男11名、女10名）

海外旅行経験 無し10名、有り11名

研修後 18名（男10名、女8名）

海外旅行経験 無し10名、有り8名

5. 因子分析の結果

5.1 因子数の決定

主成分分析によるスクリープロットと平行分析の結果（図1）から2因子解を適当とした。

Parallel Analysis Scree Plots

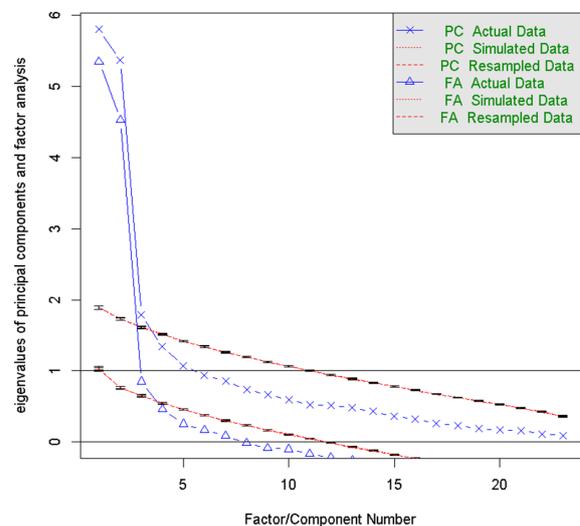


図1. スクリープロット

5.2 因子の命名

因子分析（最尤法、バリマクス回転）を行なった結果、図2のような因子負荷量を得た。因子負荷量の絶対値0.40以上を示した項目をもとに上位2つの因子を解釈することにした。

因子1 (F1) は、項目21（きれいな）、項目22（整然とした）、項目1（先進的な）などでかなり大き

		回転後の因子負荷量			
		F1	F2	F3	共通性
x1	先進的な	0.80	0.03	-0.17	0.67
x2	規則を柔軟に解釈する	-0.18	0.32	0.25	0.20
x3	集団の結束力が強い	0.06	-0.04	0.28	0.09
x4	親しみやすい	-0.29	0.45	0.35	0.41
x5	自由な	-0.06	0.53	0.31	0.38
x6	穏やかな	0.02	0.19	0.61	0.41
x7	理解しやすい	0.04	0.43	0.23	0.24
x8	あたたかい	-0.38	0.40	0.54	0.58
x9	男女平等な	0.10	0.47	0.09	0.24
x10	変化しやすい	0.07	0.53	-0.24	0.34
x11	豊かな	0.86	0.10	-0.07	0.75
x12	活気に満ちた	0.04	0.78	-0.22	0.66
x13	近代的な	0.81	0.15	-0.16	0.71
x14	友好的な	-0.08	0.55	0.47	0.54
x15	明るい	-0.11	0.64	0.14	0.44
x16	過ごしやすい	0.66	0.29	0.31	0.62
x17	おもしろい	0.12	0.57	0.19	0.38
x18	便利な	0.88	0.07	0.11	0.80
x19	開放的な	-0.00	0.78	0.06	0.61
x20	楽しい	0.29	0.70	0.24	0.63
x21	きれいな	0.93	-0.03	0.01	0.87
x22	整然とした	0.87	-0.10	0.05	0.77
x23	スケールが大きい	0.17	0.41	-0.01	0.20
	説明分散	5.30	4.51	1.69	NA
	寄与率	0.23	0.20	0.07	NA
	累積比率	0.23	0.43	0.50	NA

図2. 因子負荷量

なプラスの負荷量を示し、「美しく先進的」と命名した。

因子2 (F2) は、項目12 (活気に満ちた)、項目19 (開放的な) でかなり大きなプラスの負荷量を示し、「活気があり開放的」と命名した。

6. 考察

6.1 タイ・シンガポール・日本に対する研修前後の印象の変化

因子1「美しく先進的」と因子2「活気があり開放的」の2つの因子にて、下記の散布図を作成した。以下は、これらの散布図を基にした考察である。

- タイ・シンガポール・日本に対する研修前後の印象の変化 (図3)
- タイ・シンガポール・日本に対する研修前後の印象変化に海外旅行の経験有無が影響するかどうか (図5)
- タイ・シンガポール・日本に対する研修前後の印象変化に男女に違いがあるのか (図6)

(1) 研修前後の国の印象とその変化 (図3 参照)

タイについては、研修前には「美しく先進的」でなく「活気があり開放的」でもないという印象が、研修後には「美しく先進的」でないことには変わりはないが、「活気があり開放的」という点では大き

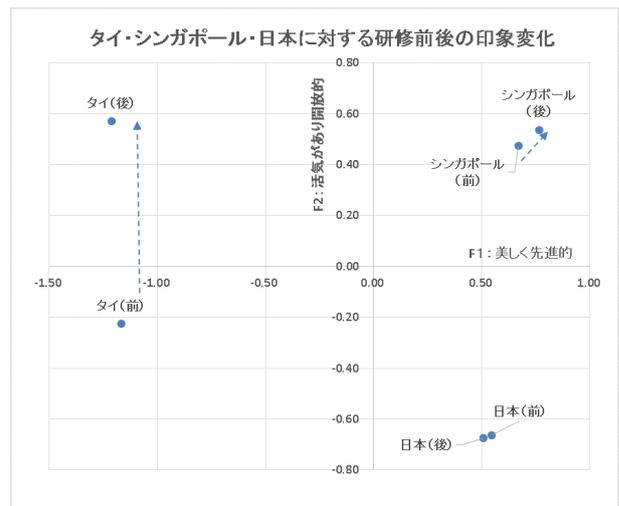


図3. タイ・シンガポール・日本に対する研修前後の印象の変化

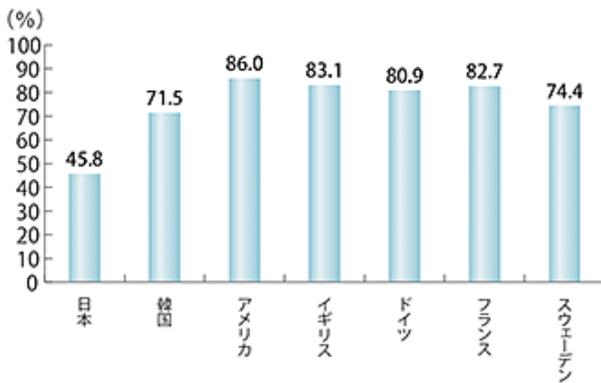
く改善し幾分シンガポールを上回るかたちになっている。これは、PBL (Project Based Learning) などの活動を通してタイの大学生の活発さ・親切さや街中の活気などが影響していると思われる。

シンガポールについては、研修の前後において「美しく先進的」で「活気があり開放的」であるという印象で3国の中で一番良い。現地を経験した後は、その良い印象の度が高まっている。これは、現地に進出している日本企業の幹部との意見交換も影響しているのかもしれない。

日本については研修前において、シンガポールに次いで「美しく先進的」ではあるが、「活気があり開放的」という点では3国の中で最低で大きくマイナスとなっている。研修後においても、その印象は変わっていない。これは、タイ及びシンガポールの現地を体験後においても相対的に変わらなかったということである。小川²⁾が、「マレーシアに対する印象と日本に対する印象については対照的な結果となった。マレーシアに対する印象は研修前より研修後において肯定的な得点が高かった。日本に対する印象については、研修前より研修後において肯定的な得点が低かった。最も平均値の差が大きかったのは「変化しにくい—変化しやすい」であり、「変化しにくい」という印象になった。」と述べていることと一致している部分がある。

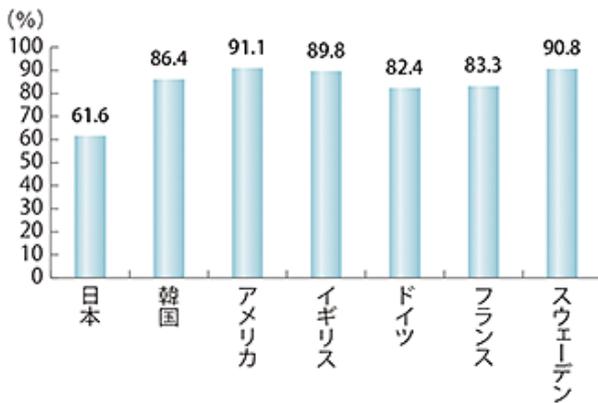
若者の日本に対するこの傾向は、平成25年度に内閣府が実施した「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」から、日本の若者の意識の特徴を、自己認識、家庭、学校、友人関係、職場、結婚・育児の6つの項目について分析した「平成26年版子ども・若者白書¹⁸⁾」の「特集今を生きる若者の意

自分自身に満足している



(注)「次のことがあなた自身にどのくらいあてはまりますか。」との問いに対し、「私は、自分自身に満足している」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者の合計。

将来への希望



(注)「あなたは、自分の将来について明るい希望を持っていますか。」との問いに対し、「希望がある」「どちらかといえば希望がある」と回答した者の合計。

図4. 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査¹⁸⁾

識～国際比較からみえてくるもの」からも窺い知ることができる。つまり、図4（「平成26年版 子ども・若者白書¹⁸⁾」の図表1（自分自身に満足している）、図表8(将来への展望)において、他国（韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン）と比較し、日本の若者は悲観的な傾向を示している。

(2) 海外旅行の経験有無（海外旅行の経験有りの内、1名シンガポール経験あり）の影響(図5参照)

海外旅行の経験無しの学生の方が、研修前後にてタイとシンガポールに対する印象（活気があり開放的）の変化が良い方に大きい。日本については、海外旅行の経験のない学生は、経験のある学生に比べ、「活気があり開放的」という点でマイナスの印象が大きい。タイとシンガポール、日本に対する印象に、海外旅行の経験有無が幾分影響している可能性がある。

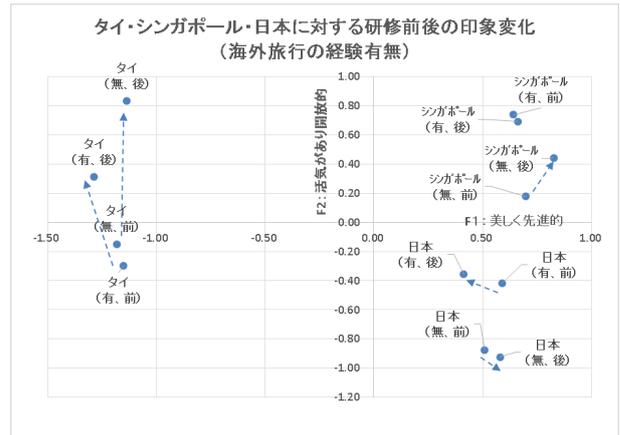


図5. タイ・シンガポールに対する研修前後の印象の変化（海外旅行の経験有無）

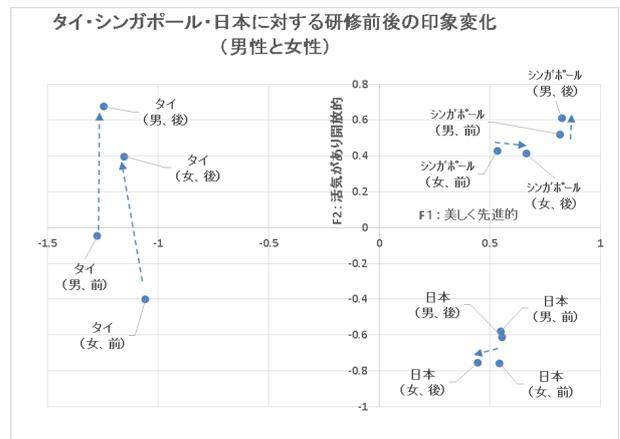


図6. タイ・シンガポール・日本に対する研修前後の印象の変化（男性と女性）

(3) 男性と女性による違い(図6参照)

男女において3カ国に対する印象の傾向は大きくは異なる。ただ、特徴的なのは、3カ国のすべてにおいて、「活気があり開放的」という点で、女性は男性よりも低い印象を持っている。これは、日本において女性の社会的に置かれている環境が影響しているのであろうか。

6.2 研修後の海外への関心の変化

(1) 外国人とコミュニケーションをとることへの抵抗感

図7に示すとおり、比率として、女性の方が外国人とコミュニケーションに対する抵抗感の減った人が多い。抵抗感のある学生が、男性10%、女性はいなくなっている。抵抗感の小さくなった学生は男性50%、女性62.5%であり、抵抗感が全く無くなった学生は男女ともに約40%である。

抵抗感の減少は、図8を見る限り TOEIC 得点と

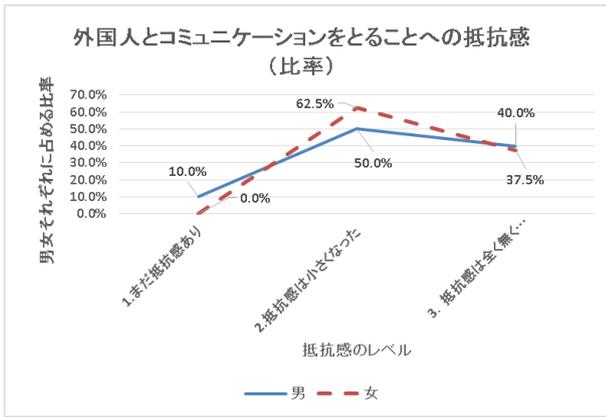


図 7. 外国人とのコミュニケーションへの抵抗感

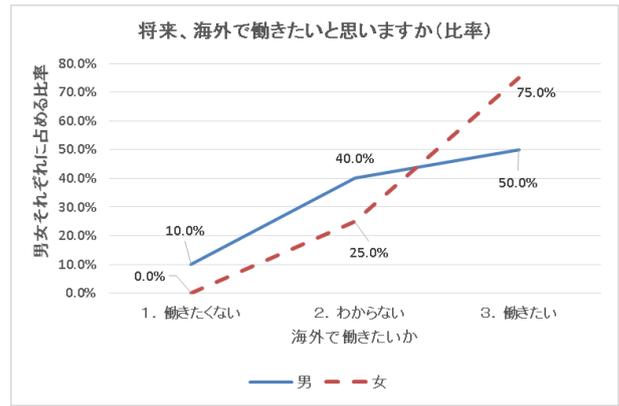


図 9. 将来、海外で働きたいか

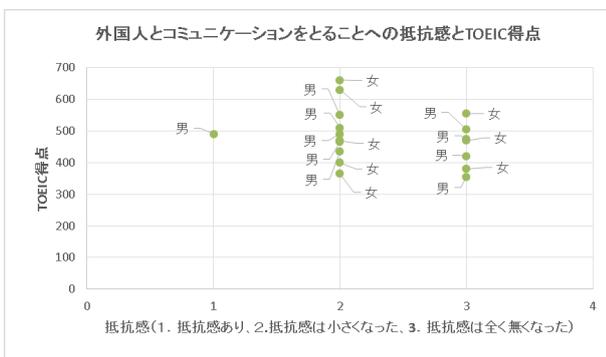


図 8. 外国人とのコミュニケーションへの抵抗感と TOEIC 得点

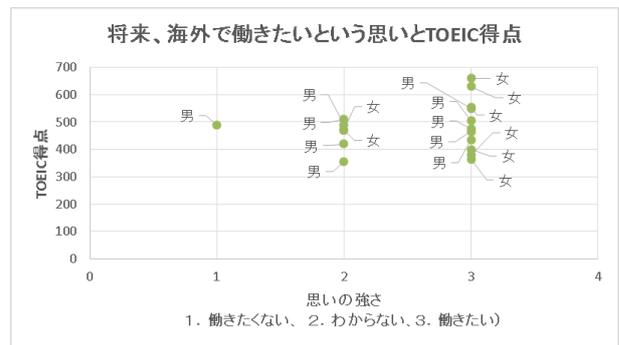


図 10. 将来、海外で働きたい意欲と TOEIC 得点

は関連がみられない。

(2) 将来、海外で働きたいかどうか

図 9 に示すとおり、海外で働きたいかどうかについては、女性の方が男性よりも積極的である。「働きたくない」という女性はおらず、「機会があれば、働きたい」という比率は 75% である。それに比べ、男性は「働きたくない」が 10%、「機会があれば、働きたい」は 37.5% にとどまっている。

海外で働きたいかどうかは、図 10 を見る限り TOEIC 得点とは関連がみられない。

被験者数が男 10 名、女 8 名と少ないこともあり明確なことはいえないが、日ごろ学生と接している立場で考えると、「やはり、そうか」という感じは少なくともある。

7. おわりに

本研究の目的は、①海外研修の前後における訪問国に対する印象とその変化、②研修後の海外への関心の変化、さらに①及び②を踏まえて海外研修の意味するところを確認すること、であった。海外に関心を持っている 20 名程度の学生を対象にした調査

という前提つきではあるが、次のことがいえそうである。

海外研修の前後において、訪問国に対する印象は確かに変化することがわかった。シンガポールについては前後ともに好印象であり、タイについては良い方への印象の変化が大きかった。日本については、「活気があり開放的」という点で大きくマイナスであった。この背景には、海外研修においては、相手国の大学生との交流や治安が悪い場所を避けていること等により、訪問国の残念な部分よりも良い面をみる機会が多いことも影響しているのかもしれない。したがって、訪問国を多面的に見る機会も必要であろう。

海外研修を経験することで、TOEIC の得点の良し悪しにかかわらず、外国人とのコミュニケーションや海外で活動することへの抵抗感が少なくなることも確認できた。

上述のことから、海外研修の目的として掲げている 3 点 (①海外大学の学生と交流し、またアジア諸国の活力を目の当たりにすることで、帰国後の学修に対するモチベーションを高める。②異文化に触れることで、国際的見識を深める。③英語によるコミュニケーション力を向上させる。) のうち、①及び

③は学生個々により程度の差はあろうが、達成していると考えられる。②の「国際的見識を深める」については、今回の分析からは直接的に判断することはできない。しかしながら、研修前の訪問国や日本に関する学びや、研修後の体験発表を通じて養われていると思われる。

本稿で述べたように、実際に海外を体験すること、つまり単なる観光ではなく現地の大学生とのPBLなどによる交流、海外に進出している日本企業の幹部が仕事の困難さと面白さを語っている姿に接し意見交換する場など、学生の将来に大きく好影響を与えている。今後とも、学生のための海外研修は継続が必要と考える。期間などの制約もあるが、良い面のみでなく多面的な体験の場を提供することも、海外研修に期待したい。

8. 謝辞

海外研修の引率者の機会を提供いただきました国際交流に関係する皆様、アンケートに回答いただいた学生の皆さん、アンケートの整理をお手伝いいただきました川越智予様（情報学群事務室）にお礼申し上げます。

文献

- 1) 相川充, “高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に及ぼす効果”, 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, vol. 58, pp. 81–90, 2007.
- 2) 小川将, 永井暁行, 兵藤宗吉, “海外研修旅行が大学生の訪問国・母国のイメージ及び文化交流に対する関心に与える影響”, 人文研紀要, no. 81, pp. 1–24, 2015.
- 3) 浅野昭祐, “マレーシア研修旅行が大学生の国際理解及び訪問国のイメージに及ぼす影響”, 人文研紀要, no. 81, pp. 25–42, 2015.
- 4) 小林文生, “短期海外研修による教育的効果の再検討: 学生の報告書の多面的な分析を通して”, 人文・自然研究, vol. 7, pp. 162–185, 2013.
- 5) 松田康子, “短期海外研修の成果と意義—学生の報告書とアンケート調査の結果から—”, 名古屋文理大学紀要, vol. 12, pp. 11–16, 2012.
- 6) 黒崎真由美, “短期海外研修の教育的意義について”, 湘北紀要, no. 33, pp. 107–124, 2012.
- 7) 松村智恵, “大学生の海外研修旅行中に実施するワークショップの有効性の検討”, 日本国際観光学会論文集, no. 21, pp. 77–86, 2014.
- 8) 垣本せつ子, “海外研修を言語教育に生かすには: 言語の中の文化を再考する”, 東洋大学人間科学総合研究所紀要, no. 14, pp. 61–81, 2012.
- 9) 藪田由己子, “短期海外研修から参加者は何を学んでいるのか: 異文化コミュニケーションの観点から”, 清泉女学院短期大学研究紀要, no. 32, pp. 31–44, 2013.
- 10) 金栄俊 and 俵石正雄, “社会人基礎力を育成する海外研修: 韓国文化交流研修での実践を通して”, 太成学院大学紀要, vol. 17, pp. 115–124, 2015.
- 11) 鈴木栄, “試行的ナラティブ分析: 学生は、海外研修で何を得たか”, 湘南工科大学紀要, vol. 50, no. 1, pp. 73–83, 2016.
- 12) 川上司, “海外研修が学習意欲に及ぼす影響について—帝京大学経済学部「アメリカスポーツマネジメント研修」を事例に—”, 帝京大学高等教育開発センターフォーラム, vol. 3, pp. 1–13, 2016.
- 13) 伊佐雅子, “大学生の短期海外研修の効果: 学生の自信感形成要因の観点から”, 沖縄キリスト教学院大学論集 = Okinawa Christ. Univ. Rev., no. 12, pp. 36–49, 2016.
- 14) 稲葉みどり, “米国短期研修プログラムの教育的効果の考察—現地での活動の省察レポートの分析を通して—”, 教養と教育, vol. 15, pp. 7–16, 2015.
- 15) 長沢伸也, “感性工学をこう考える”, バイオメディカル・ファジィ・システム学会大会講演論文集: BMFSA, no. 11, pp. 1–8, 1998.
- 16) 長町三生, “感性工学とは(感性と繊維製品)”, 繊維学会誌, vol. 50, no. 8, pp. 468–472, 1994.
- 17) 市原茂, “セマンティック・ディファレンシャル法(SD法)の可能性と今後の課題”, 人間工学 = Japanese J. Ergon., vol. 45, no. 5, pp. 263–269, 2009.
- 18) 内閣府, “特集 今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの～はじめに”, 平成26年版 子ども・若者白書, 2017.

Changes in Students' Impressions of Countries before and after Thai / Singapore Overseas Training and their Background

— Analysis based on Kansei Engineering—

**Motohiko Igata^{1*} Shinichiro Sakikawa²
Takayuki Kurahashi³ Saki Hamamura²**

(Received: May 8th, 2017)

¹ School of Information, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

² International Relations Division, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

³ General Affairs Division, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

* E-mail: igata.motohiko@kochi-tech.ac.jp

Abstract: We received the opportunity to participate in the Thai-Singapore overseas student training as leaders. Using this opportunity, we decided to analyze the changes in the students' impressions of both Japan and the countries visited before and after training. In addition, we examined the change in resistance to communicating with foreigners and the change in willingness to work abroad. Based on these results, we resolved to think about the meaning of overseas training. In this investigation, a questionnaire survey and sensibility engineering (Semantic Differential Method) were employed. As for the impression of the country, we were able to extract two factors, "beautifully advanced" and "vibrant and open" as the main factors. Singapore was at a high level on both factors. The impression of Thailand was largely negative on both factors, but after the visit, Thailand's impression changed greatly on the "vibrant and open" factor. The impression of Japan was as good as Singapore's on the "beautifully advanced" factor. However, on the factor of "vibrant and open" Japan was significantly negative compared to both Thailand and Singapore. This paper explains our previous research, the outline of the overseas training, the method of investigation and analysis, and reflection on the overseas training based on the analysis results.